「ザヴィエル城の息子」

増山雄三

半世紀以上も前になるが、私がスペインのアスタノ造船所へ所用で出かけた時、暫く時間ができたので、そこの所長から、「ザヴィエル城」へいこうと誘われたが、ピレネー山麓にあったそれは、城というより、岩の塊の様な、城砦という小さなものだった。

山麓にはザヴィエルという同名の寒村があり、そこから疎林越しに、ザヴィエル城がタ陽を背に蹲っているのを見た時、何となく日本の近世型の城郭に似ていると思ったが、それでもこの城は、ローマ教皇庁の財産で、老いた修道士が一人で城の番をしている。

ザヴィエル城は、日本城郭の特徴である石垣こそないが、その代わりに上部構造が、スカートを広げたような露頭岩盤の上に建っていて、城内を歩くと、曲輪もあれば犬走りに

相当する構造のほか、本丸、二ノ丸もある。

そして、この城における主要な構造物は聖堂であり、この場合の聖堂は、防禦というより威容のために存在し、その辺りは、安土城の「天守閣」を思い浮かべるが、ザヴィエルは既に日本を去り信長に会ってないので、彼は、それ以降の宣教師に聞いたのだろう。

暫くその周辺を歩いたあと、私たちは日没寸前の城へ入ったので、中はかなり暗かったが、先の老修道士はローブの裾を翻しつつ、懐中電灯を持って案内してくれ、有事には弩弓で城外の敵を討ったのだろうが、平時には明り取りの岩窓がある、**ザヴィエル少年**が勉強した、小さな部屋を案内してくれた。

ザヴィエルがやってきた当時の日本人は、彼の説教を聞いて不思議に思ったのは、神がすべてを創造しかつ全能で、さらには、一切をお見通しであるとするならば、どうして日本人が発見されるのが、かくも遅かったのだろうかという事だったが、彼は、この厄介な

質問を何とか切り抜けた。

ザヴィエルの生地はバスクで、ここはスペイン領に属する少数民族の地で、言葉はインド・ヨーロッパ語族でなく、文法がどちらかと言えば、日本語に似ていて、背は低く気質は短気で、異国にあっては望郷の念が強く、貌はどちらかと言えば、東方系にやや近い。

ザヴィエルが来航する六年前、ポルトガル人が種子島に漂着したが、それが日本人の見た最初の西洋人で、彼らは小麦色の肌と小柄な体格を持ち、黒髪の人達だったので、日本人にとって違和感を少なくし、更に、ザヴィエルがバスクという少数民族の容貌と体形を持っていたのが、日本人に一層の親しみを持たせた、という事なのだろう。

ただ日本人と違うのは、早くからカトリックを受容していた事だったが、ザヴィエルが驚いたのは、日本人が盗みを憎み、社交性があるのはバスク人と同じで、際立っているのは、知識欲が旺盛で、かなりの人は読み書き

ができる事だった。

この美質は、当時、戦国という人心の滚った時代だったとは無関係でなく、戦国期は、個人個人で自分の生死を決め、宗教観も、自分の手で求めざるを得なかったからだ。

令和三年十二月